
魔王も学校也大嫌いだ。

えにぐま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王も学校も大嫌いだ。

【Nコード】

N5247T

【作者名】

えにぐま

【あらすじ】

とある学園で魔王と呼ばれている少年は一人の少女と出会う。

【そんな話】

「なわけがない」

「色々な意味で、なら…何人も会ってるか」

「お前ら、人のことをどういう風に見てやがる」

プロローグ from NEXT END

俺は魔王、であるらしい。

その昔に魔王が大暴れしていた時代があるらしい。が、今は昔のなんとかってやつで今では魔王なんて名だけの存在になり下がってしまったている。

魔技システムと呼ばれる…まあ、ただの武器に魔力コンバートさせて強力な武器に変える仕組みが出来上がってから魔王は狩る存在になってしまったらしい。

あ、といっても世界のほとんどの魔王が消息不明か消失してしまったらしく会う機会など全くと言っていいほどにないが。会うとすれば俺のように幼少の頃から”人に飼われている”者だけだ。

そして現在。俺は何の境遇なのか、または何の嫌がらせなのかその魔技を作る武具錬成学校、そして魔技を使う修錬生訓練学校の二つの顔を持つ学校に所属している。

名は：B (Berk) C (Conomment) 学園とかなんとか。人の名前が由来の学校名らしいが詳しくは知らない。

「独り言はお済ですか、マスター」

不意に声が聞こえた。空耳だ。無視するのが妥当な判断と言える。

「無視ですか。仕方ありません、マスターが隠し持っている秘蔵映像を学校中に晒してくるとします」

無視だ。そんな物を隠し持っている記憶などないのだから。

「…私はマスターの見たものを全て映像化出来ることをお忘れではないですか」

「…お前、本当に魔技とは思えないほど人間じみてるよなあ…」

「恐縮です」

褒めてねえよ。と突っ込みを入れつつ俺は目の前に居る小さな小

さな妖精のような監視員を見た。

魔技というのは何も武器だけではなく機械、特にこういう何かを観測させるための機械にもその技術を使う。そうするとあら不思議、なぜか話せるようになったではないか。というのは嘘のようで本当の話なのだ。で何故そうなるのか、不具合は出ないのかなどと色々分かっていないことが山積みだそうだ。

ま、そんな事とは関係なく学問やら技術っていうのは進歩していく。進歩した結果が目の前にいるこの小さな妖精というわけなのだが…。

「失礼なことをお考えではないですか？」

「いや、小さいなとしか考えてない」

「そうですか、てっきり欲情したのかと」

「お前は俺の心拍数とか見てるものが分かるんだろうが…」

「…日々欲情されると困ります…」

「いや、もういいよ」

俺はため息をついてその場に寝っ転がった。修練場のすぐ近くの本陰で空を見ながら思った。

「平和だなあ」

「…マスターはドMのですか」

時たま、この妖精が考えていることが分からなくなる。そんな日々すら平和で、凡庸なただの名無しの魔王の記録された一日にすぎないのだ。そして今日も平穏な日々は—

「おーい」

一壊されるものである。

「…」

「マスター、呼ばれてますが」

「いや…空耳だろう。俺に話しかける生徒などいる筈がないだろう」

「2，3人ほど知っているのは私の記憶違いでしょうか」

そうだ。という前に声の主は近くまで走ってきたのか息を切らし、ズイと黒い箱のようなものを差し出してきた。

「昨日…っ完成し…たんだ」

とりあえず落ち着いて息を整えろ。とは思ったが無視することにした。

「これで君も魔技が使えるはずさ！」

そのセリフは聞き飽きた。という俺の内心を読み取ったのか近くを飛び回っている妖精がはぁ、とため息をついた。

ついでに言うておくと魔技は強力故にリミッターと呼ばれる制限機をつける。でないと使用者の魔力が暴走して爆発。酷い時は死んでしまうらしい。だから、リミッターの研究開発というのは真っ先に行われ、今となつては研究が完全に終了している学問だったりする。が、なくてはならない物ではあるため学問自体はなくならない。そして…俺みたいな異常な魔力を有した使い手に合うリミッターなど市販されているわけもなく2年で唯一の魔技を持たない生徒となつてしまっている俺がここにいる。

それでだ。リミッターを専攻している者としては俺みたいな存在に合うリミッター開発という名目で研究を始めた生徒も出る始末。そして、先ほど走つて来たのは同学年のリミッターを専攻している生徒だ。

「あのだな…今までそれに騙されて何度死にかけたと」

「今度は大丈夫だから！」

顔の近くに黒い箱を差し出してはさぁ、さぁ！と急かしてくる。

あぁ、また暴走するんだろうな。と思いつつも手に取ってしまうあたり、俺はお人好しなのかもしれない。いや、押しに弱いだけなのか。

「さぁさ！修練場へレッツゴー！」

袖を引っ張られながら修練場へと誘導されていく。後ろからはゆらゆらと妖精がついてくる。

日常っていうのは慣れるものだとか教わったが、どうにもこの学校は慣れそうにもない。

プロローグ of fast

人生というのは時に不運で幸運で。そんな二つの繰り返しである。たしか、絶対的な運を持っている者がそんなことを言っていた。

そうならば、俺にとって今現在是不運か幸運か。たぶん前者であろう。

A C学園。全生徒数100万にも達する異常な学校だ。ま、魔技を作る者に扱う者が揃えば生徒数なんてそんなものになるらしいが。ともあれ、そんな異常な学校に入学してしまった俺は不幸であると言いたいわけである。

「はあ…」

「ため息をつくど女運が逃げていくと聞きますが」

「元からないだろ」

ルクレール・ウサミ。それが俺の名前…だったりするのだが。

何かが間違えている気がしてならない。そんな風に思っている者が多いだろうがこれで正常なのだ。

俺の母、と言っても”育ての”が付いてしまうが…まあ、その母

一字佐美 順子じゅんこは俺が5、6歳の頃に俺を養子にと申し出たそうだ。

昔はどうか知らないが、今現在において魔王の子供は養育施設という名ばかりの実験施設で管理されている。養子は受け付けているがそれを行ったものは俺の母以外知らない。ま、その実験施設の決まりで名前はそのまま使うこと、なんていうふざけた決まりのせいでこの名前になってしまったわけだ。

「…マスター、男運もないですね」

「要らんな、その運」

そしてさっきからうろちろと俺の周りを飛び回り、話しかけてくる妖精のような姿をした監視員—Code Number002ことイヴは文字通り俺の監視をするためにここにいる。赤い髪に赤

い羽根を羽ばたかせてうろちよろする落着きがない奴だ。そして、疲れると俺の頭や肩に乗る癖があったりする。

イヴの目的は俺の身体の監視。つまりは健康状態チェックである。俺の手首に巻かれた白いブレスレットによって俺の心拍数や血中酸素濃度なんでものを計ったり、感覚リンク魔法とかいうふざけた物で俺の見たもの聞いたことなどを知ることが出来る。そしてそれを録音、録画出来たりするわけだ。

まあ、一番異常な機能はその性格である。

イヴみたいな人工知能を持たせた魔技はある一定以上普及している。この学園の3割程度は持っているはずだ。ただ、そのほとんどは無駄なことは喋らず機械的である。逆にそれがいいとほざいている馬鹿もいたりするが、今はどうでもいい。

イヴのように無駄口を叩く魔技は世界で3体しかいないらしい。試験体であったCode Number 000と第一実用機であったCode Number 001、後はイヴである。ともあれ試験体の000は消息不明、001は盗まれ闇市場に出回っていると噂がある。ともあれ、無駄口を叩く魔技はイヴだけ場所が分かっているという状態である。

「それで始業式には出ないのですか」

魔技作成実験施設付近の木陰（始業式の現場から一番遠い場所）で休んでいるというのに出るわけがない。

「出ないな」

「そうですか」

イヴは俺の周りをくるくると回りながらトンボが木の枝に止まるように俺の頭の上で着陸しそのまま座った。

「先ほどから私が何をしているのかご存じで動かないのですか？」

「動いても追跡されるだけだろ。それにこねえよ」

イヴはそうですか。とだけ言い頭から降りて肩に乗った。ばたばたと足をばたつかせて暇だと訴えてくる。

「あーはいはい。動けばいいんだろ」

俺はそのまま立ち上がって場所を変えることにした。実験施設から数m離れた所にカフェがある。生徒数100万であるこの学校は一つの街としてその存在を成している。先生や事務員、その他運営を行うものなどを含めると400万程度の大都市となる。ま、そんなわけで始業式中でも活動している店というのは存在する。

実際、疲れるだけの始業式をサボる者は少なくない。出席を義務付けられているのは1年だけである。ただ、卒業を控えた3年などが出る人が多い。つまり、サボるのは2年である。

と、そんな学校事情はどうでもいいことではある。流石にサボってカフェでお茶なんてしてる奴なんているはずがないからだ。大抵のものは家だとか部室何かで引きこもっている。

カランカラン

カフェに入るとレトロという感じが似合う鈴の音が聞こえた。内装も茶色をメインに古めかしい感じのいかにも雰囲気のあるカフェである。カウンター：なのかは分らないがその付近にいる給仕であるギャルソンが「いらっしやいませ」と頭を下げた。

ギャルソンが頭を上げた後で俺の姿を見たのか少し驚いて席へ案内された。男が一人でカフェに来たことか、魔王と類似する容姿にか、周りで飛び回っているイヴに驚いたのかは俺には判断することは出来なかったがあまり歓迎されてはいないことは分かった。

「さて」

カフェになど来ることなどない俺にはメニューを見て即座に決められるような即決力は持ち合わせていない。とりあえずといった物を選ぶのがベターな選択だ。時間的にもサンドイッチとブレンドコーヒーあたりがいいだろうか。後はイヴ用に焼きプリンか。

などと考えているとイヴが机の上に座って一方だけを熱心に見ていた。

そんなに欲しいものがあるのかと思いつながらもそちらを向くと異質な光景がその場に出来上がっていた。ぼさぼさの髪をきにすることなく、作業着のまま数十皿はあるだろう料理の山を胃の中に収

めていく一人の女性の姿が：そこにはあった。

「あ、すみませーん。クリームパスタと五目チャーハン追加で」

まだ頼むのかと感心して見ているとイヴが「マスター」と呼んだ。「学園内でそんないやらしい目つきで女性を見ていると公然わいせつ罪で捕まります」

「捕まらねえよ！？つかそんな目で見てねえよ！」

イヴは満足そうにニヤニヤとこちらを見ている。まあ、しまったと思うよりも先に不幸というものは訪れてしまうもので。

ドンという音と共に不幸は俺の元にやってきた。

「ふいみふあわふあふいー」

「とりあえずその口の中にあるものを片づけてから喋ってくれ」

先ほどまで別のテーブルでいた暴食女は俺のテーブルまで足を伸ばしてきた。手には大盛りであろうピラフかチャーハンか分からないものを持って。

女性の髪の色は金色でぼさぼさでありながら煌びやかに光っている。元はストレートか後ろで束ねたポニーテイルということが髪癖で分かった。ま、ぼさぼさ過ぎてどちらかは分かりかねるが。そして、研究者らしくメガネを：かけてはいなかった。

それはそうと、女性は別に食べることを止めることなく大盛りであったピラフを平らげようとしていた。俺と話がしたかったんじゃないのか、と思いつつも変な人に絡まれたと複雑な気持ちで食べるのを見ているいつもの通りにイヴが絡んでくるはずだ。

「絡みませんよ？」

「人の思考を読むんじゃねえ」

申し訳ありません。とイヴは言うと言いたいて俺の頭の上に乗った。飛んでくる米が嫌だったようだ。

それから数分後。というかあの量を数分で片づけられるこの女性が恐ろしいのだが突っ込まないことにしよう。

「失敬失敬。ここ最近まともな食事を取ってなくてねえ」

女性は口の周りをハンカチでぬぐった。こういうのはレディの嗜

みだ。とかどこかの誰かが言っていたがこの女性にそんな物があるとは到底思えない。

「さて、本題に入りたいのだが―」

女性は目を鋭くして俺を直視する。それは蛇に睨まれているような鋭いものだったがなぜか慣れてしまっている自分がいる。慣れというものは恐ろしい。

「一君が”名だけの魔王”だな」

”名だけの魔王” この学校では一年の最後に実践訓練としてトーナメント形式の戦闘に全生徒が招待されたりする。その戦闘において俺は色々とやらかしてしまったわけで…そんな名が付いてしまっている。

と、回想に浸っている場合ではないので女性の返答として首を縦に振った。

「ふふふ、私もアレを見たが中々にヘタレて面白かったぞ」

「そりゃどーも」

別にヘタレてたわけじゃないんだがなーと言っても相手にされないことは分かっているので諦める。

「まあ、実は君のことは夏くらいには知っていたんだがな？」

「…」

ああ、そうか。この人は。

「察しが早くて助かる。じゃあ頼むよ、君の一年間の報告を…さ」
女性はにっこりと笑うとギャルソンを呼んで追加注文したものの催促をした。

大勢の雑踏は鬱陶しい

春。それは魅惑の季節。

春。それは唐突の季節。

春。それは…。

「はあ…」

憂鬱な季節だってーの。

俺はBC学園のパンフレットを見ながらそう思っていた。新しい季節、新しい出会いが君を待っている。とかどれだけ普通な売り文句だよと思ってしまう。まあ、色々なところから色々な奴が来るからこういう売り文句なのかもしれないが。

「こら、ルー君！全然準備整ってないじゃない！」

そんなパンフレットを見ていたせいで母さんに怒られた。母親の白衣を纏ったその姿はとっても異様だった。何年も一緒に過ごしてきた俺ですら一切慣れない。

「もー私の白衣に見惚れても何も出ないからね？」

「いや…いや、いや」

この人はふざけていて、ほんわかしてて人の話を一切聞かない。なのに職場では天才とか他の職場の方から聞いたらマッドサイエンティストとか言われている立派？な科学者らしい。神は人に二物を与えないとかこの人を見てると良く分かる。

「はいはい、カバン持って。ハンカチとティッシュ持った？」

「あーはいはい、ぽっけに入ってるよ」

母さんはよしと満面の笑みを浮かべて行こうかと言った。

魔法で動く汽車…とかロマンだよなーと母さんは電気で動く汽車を見ながらつぶやいた。俺はこの電車でBC学園まで行かなければならない。たしか3、4時間程度で着くはずだ。母さんとはそこで別れて学園行きの電車に乗る。

流石に学園の新人期間というわけで電車は込み合っている。俺の

席を除いたほとんどが。

さて、学園に着くまでには暫く時間がかかるので色々と考え事が出来そうだな。

BC学園。内部構成員、つまり生徒or学生＋教師or講師＋商人等の人数すら把握出来ていないと噂されている案外適当な学校だ。講義内容は一般教養と魔技まぎの使用法および作成法。

学科は技術者側として4科、使用者として5科。まあ、実際科を決めるのは2年以降のことで一年である俺らにはあんまり関係ない。一年の教科は一般教養＋特殊教養と呼ばれる魔技の基礎知識だ。内容は技術者、使用者の双方とも同じであるらしい。魔技の基本構造、原理などがそれに当たる。

二年以降の内容は技術者と使用者で大きく異なるが一般教養の内容は薄くなり、専門知識が増える。

技術者は4科とも内容はことなるが魔技の生成、製造方法や制御法と機械に関する力の掛り方や振動なんかを習う。

一方、使用者は5科ともに全く違う内容を習うが基本的に実習と魔技を使うテクニクを習う。そして、体育が全科目で多く取られている。

三年以降は更に専門的な内容を一気に大量に詰め込む座学が増える。実習なんかは極端に減る。

四年になるとより専門的な内容を習うか、就職するかの決断を迫られる。授業は週2という限りなく減り、出ても出なくてもいいという仕様となっている。代わりに四年生以上の研究生と呼ばれる人々の下について手伝いをさせられる。

と、まあ…こんなものか。

他に一年の終わりに使用者組は実力テストと呼ばれる戦闘訓練が行われたり、夏に学校行事で肝試しがあったり、始業式の後にはオリエンテーションなんてものがあったりする。イベントが大好きな学校である。そのため、先生は忙しいらしい。

ああ、そういえば実力テストの1番の者は2, 3, 4年ごとにパ
ンフレットに名前が載ったりする。今現在は2, 3年は女子、4年
は男子が1番らしい。名前は覚えていないがね。

『ルー君へ

今日から学園初日だね。

あ、でも暇だから電車の中で開けちゃったりしたら一日前かな。

うーむ、書きなおs(略)

〜10行後〜

まあ、本題に入るとね。アレがないと学園生活困ると思うから鞆
の中に勝手に入れちゃった！

というわけで使ってね？あ、後不純異性交遊はダメだからね？同
性なら認めなくm(略)

〜2行後〜

あはは、無駄話しちゃった。えーと、とりあえず大変だと思うけ
ど頑張ってるね。

P.S.

もし、この内容を破った時には恐ろしいことが起きると思ってね？

From 愛しのエリーより

』

鞆の中にはこのような不吉な手紙が入っていた。誰が愛しなのか
エリーなのか教えてほしい。

俺はその手紙をきちんと折って窓から投げ捨てた。幸い、俺の名
前はルー君という分かりにくいであろう物だったし人物断定できる
ようなものではないはずだから。

ばれたら母親が腐女子だと思われるくらいだ。問題ない。

いや、あるんだけどね。

俺はカバンの中を探って例の物を取り出した。黒い手袋だ。俺専

用に作られて魔技。

とりあえず、手袋をカバンの中に戻して本を読むことにした。学園につくまで後2時間ほど。

ページ数で言うと250ページくらい読み進めたあたりで学園に到着するとの連絡が入る。

俺は本を鞆の中にしまい、列車を降りた。数千の人間が列車から一つの場所へ移動している。まるで光に呼ばれている虫のようだ。

まあ、俺もその一匹になっているのだが。

俺たちが向かっているのは移動用ポーターだ。許可証によって起動し、住宅街のポータールームと呼ばれる部屋に転移させられる。

まあ、不審者防止用らしい。

駅員さん方は列車そっちのけで学生とその他の整理…というのだろうか。一列に並んでくださいと呼びかけている。

駅員さんも大変だと感心しながら鞆の中から許可証を取り出す。

名前…ルクレール・ウサミ

血液型…A型

出身…エイルブルク

備考…なし

と、お粗末なほど適当な身分証明書を見ながら自分の番が回ってくるのを待つ。と言ってもそこまで時間のかかるものでもなく、皆止まらずただ歩いてポーターの中に入っていく。

流石に一気に2, 3人でワープするのは危険らしく一列で&歩いてというのが鉄則らしい。魔技を習うこの学校ですらこの場所にかテレポーターはない。会社に入ってもコレを見るのは稀である。

まあ、流石に数千という数の人間を運ぶとなるとそれなりに時間がかかるものである。

色々な髪の男、女が荷物を持ち緊張しているような強張っているような顔持ちで列に並んでいる。ほとんどの人間が一年であり、新

人生だからである。それなりの緊張と興奮をこの場でひしめかせているようだ。

さて、そろそろ俺の番のようだ。

+

「とある音声記録」

「レイブンハルト殿」

「…その名前で呼ぶのはやめてくれるかな…すっげえ恥ずかしいんだけどさ。それに殿とか」

「そんなことを言ってる場合ではないのです」

「お前がレイブン…ハルトとか呼ばなきゃいい話なんだけどな」

「そんなことよりも」

「まあ、聞いてくれないことくらい知ってるけどよ」

「魔王がやってきます」

「…よし、いい精神科を紹介してやるぞ。大丈夫だ」

「…いえ、それで済む話ならばよかったのですが」

「…うわぁ…学園長しめてくるか」

「もう遅いかと」

「何考えてんだ、あの爺」

「…仕方ありません、あの方は…」

「ま、ようやく動き出したと言えなくもねえかな」

「そうかもしれません」

「暫くは過激な動きは止めとくか、面白そうだしなあ」

「…御意」

「ドアの開く音」

「人が歩く音」

「…レイブン、ハルト、ぎ—」

「機械の壊れる音」

十

学生寮は案外綺麗で広い。まあ、住宅街みたいな規模だし商店なんかもあるあたり首都のマンションなんかとあまり変わりはないのかもしれない。料金的にはかなり安いしお得といえなくもない。

「はあーやっと終わった」

学生寮には先に荷物が運び込まれている。これは寮長がやってくれているらしい。

：ただ、寮長はこの学園内でたったの一人であり誰も荷物をどう運んだのか知らないらしい。学園の七不思議だと言われている。まあ、この学園の場合は七ではなく八不思議らしいけど。

改めて部屋を見渡す。無数の本が本棚に詰められている。その他段ボールやゴミ袋といった物が一ヶ所に固めておいてある。部屋自体は綺麗に整理され生活感というものは皆無だ。が、まだ整理しきれていない段ボールに入った荷物が部屋の片隅に置かれている。

「ゴミっていつ出すんだっけ」

そう言いながらベットに倒れている俺は掃除やら整理整頓やらっていうのが苦手な子なのだろう。そのまま目を瞑ってしまえば寝れるかもしれない。

明日は新入生歓迎パレード、明後日は始業式&オリエンテーション、明々後日は講義説明会。といっても新入生歓迎パレードは部員確保のための見世物であるし、オリエンテーションもその延長線上の産物だろう。部活などに入る気は毛頭ないので俺にはあんまり関係ない話だ。

さて：と。

「荷物整理の続きをやるか」

十

「とある音声記録」

「ちょ、待ってくれ：いきなりそんなことを言われてもだな」

「いえ、決定事項です。お姉様の身の危険に関わります」

「いや：うん、まずは同級生なんだからお姉様は止めてくれないか：」

「ではお嬢様」

「：もう、それでいい」

「どうか、躰のなっていないメイドにお仕置きを」

「いつからメイドになったんだ！？いや、返事はしなくていいから話進めようか！」

「はい、明日は私たちにとってトラウマになる可能性のある日なのです」

「ふむ、私は毎日がトラウマの連続なのだが」

「いい思い出です。それよりも、明日は必ず仮病で休んでください」

「自分のことは棚に上げるわけだな」

「そんな：今日部屋に來いだなんて」

「言っていないぞ、そんなセリフ。はあ、お前と話していると疲れるよ」

「退屈はしないでしよう？」

「：はあ、フィーには勝てそうにないな」

「？学年一位のお嬢様に私が勝てるわけないと思いますが」

「：相手がフィーなら降参するよ」

「そんなに私のことを愛しているのですか：困ります」

「困りますと言いながら顔を近づけてくるな」

「そんなに照れー」

+

この世にはとある言い回しがある。例えば怒りで辞表や手紙、離婚届などを無理やり押し付けけることを「三行半を叩きつける」なんて呼ぶ。では、次の言い回しの答えは何でしょう。

「あなたを死ぬほどに殺したい」
誰か教えてくれ。

「いや、ドア開けた瞬間の初対面の人にそれは酷いと思うんだが」
「そんなことはありません。愛情表現の一つにそういうものがあります」

「それはどう考えても殺人鬼や精神異常者の考えだろう」
そして、そこまで愛されていないだろう。

「そうですね、言い方を間違えました。私の知らないところで殺人事件の被害者になってください」

「：もう少し遠慮というものを知っててもいいと思うんだが」
俺はこの身長160cm程度の女に会ったことはないし、こんなことを言われるようなことはしていない。まあ、理由としては考えられるのはあるがね。

「まあ、いいではないですか。少しくらい」

「少しじゃないんだが」

「小さな男ですね、それでも人間ですか？」

ボケに突っ込んだら人間として否定された。なんか落ち込みそう
だわ。

：で、何で俺はこんな女と話してるんだ。あ、時なんて戻す便利な呪文を俺は知らないから戻せないぞ。

「それで俺に何の用なんだ」

「ええ、死んでほしいのがまず1」

まだ引っ張るか、このアマ。

「その2に荷物が追加で届いていたので届けに来ました」

小さな桐の箱に入った高級品を感じさせる箱だ。ついでにピンクの手紙が付いている気がするが今はいいだろう。

「その3に毒物を食べ物に混ぜようと思っていましたが、冷蔵庫の中に何も入っていなかったので断念しました」

「：警察呼んでもいいか？」

「構いませんが、絶対に彼方は後悔しますよ」

女の顔はいたって真面目で無駄にイラついた。何なんだ、こいつ。
「それでは、私はこれで」

ああ、どうも。という暇もなくドアを思いっきり閉められた。距離的に顔にぶつかってもおかしくないような距離だったのにも関わらずだ。まあ：ドアには安全装置として障害物察知機能（移動先に物がある場合に止まるような機能）が付いてはいるんだがな。

「全く：なんか、疲れた」

まだまだ、荷物整理は終わりそうにはなかった。

+

「とある音声記録」

「ねー、ミーちゃんは明日の新生活パレード出る？」

「み、ミーちゃん？」

「ミスズっていうんでしょ？だからミーちゃん。てか疑問に疑問で返すのは失礼だよお？」

「あ、うん……。明日は家でお掃除しようかなって」

「お掃除：かあー。ふ、彼氏でも連れ込む気だな！」

「か、彼氏なんていないよ……？」

「なんで疑問形なの？」

「う……」

「ははあん、好きな人がいるんだなあ？このおませさんめ！」

「……いると思うんだけど……どうなんだろう」

「む……そこで照れてくれないと「かあいなあこいつう」とか出来ないじゃん」

「たぶん一生接点ないから……」

「この子……妄想癖と集中すると周り見えなくなる癖があるよ……」

「それで！えっと……名前教えてもらってない……」

「あ、あーそうだったね。私の名前はクリスだよ」

「じゃ、クーちゃん。クーちゃんの好きな人は？」

「…いない」

「なんで顔赤いの？」

「う…何でもない…」

「かぁいいなぁこいつう」

「…何かミーちゃんには勝てない気がするよ」

+

桐の箱というのは結構硬い。殴ったら鈍器になるくらいには硬い。しかし、しかしだ。だからと言って人を殴ってはいけない。それは人として、人間として当たり前前の常識だろう。

「うん、俺が悪かった」

「もう遅い気がしてならない」

頭から血をダクダクと流しながら男は俺のすみかになる部屋にいた。数秒前、「死んでください」と言われてリビングに戻ると知らない男が座っていて「やあ、お邪魔しているよ」なんて言ってきたらとりあえず手元にある物で殴ってしまうものだろう。流石に何度も殴ったのはやりすぎたと反省してはいるが。

「いや、まだ大丈夫だ。まだお前が悪い」

「何か思っていた以上に口の悪い子だよ…」

そんなに口の悪い子なわけがないだろう。きつとさっき出てきた女の影響だ。いや、それ以前に不法侵入してきた奴に礼儀など説かれたくない。

「それで何か用ですか、血まみれのお兄さん」

「今、殴ったことすらなかったことにしようとしたよね」

全く何を言っているのか分らない。被害妄想もいいところである。

「はあ、まぁいいや。用というのはね、コレ」

血まみれの男が出したのは血がついた桐の箱と全く同じものだ。ただ、封印と言った感じの札が貼^{ふた}つてある。

「なんですか、その箱」

「なぜ敬語になったのか不思議なんだけど、そろそろ出血量が限界だから手短に」

男は手紙と一緒に桐の箱を渡し、じゃあねと消えてしまった。まるでそこに最初からいなかったように。

渡された桐の箱二つ。2度あることは3度あるとかいうが、贈り物というのは今まで一度も貰ったことはなかった。勿論手紙も、だ。「分かったことはあの男がテレポーターってことだけか」

+

「とある音声記録」

「…」

「あ？嫌な予感？」

「…」

「んなもんいるわきゃねえだろ」

「…」

「ツチ。わあったよ、わあったから怯えるのをやめろ。気色が変わりい」

「…」

「あーはいはい。それで…てめえの言っていることがあってるとしてだ、何を怯える必要がある」

「…」

「…はっ、あの絶対者にはかなわねえけどな…他の奴には負けるわけがねえだろうが」

「…」

「信頼がねえこった」

+

3度目。桐の箱ではなかった。ただの物体の一つとして瞬時に届

いた。こんなことが出来る人物を俺は一人しか知らない。父親。至って正常な変態である父親の仕業だ。と言っても血は繋がっていないし、会ったのも生涯で一度だけだ。赤の他人とそう変わらない。「…全く、変人なんだよなあ…あの二人」

あの二人というのはもちろん父母のことだ。結婚して、子供を作らず、互いに信頼し、全く逆の職についている。この二人の話をしようとする日が暮れるのでしないが、至って異常なところにいる人物たちだ。

まあ、あの二人はいいとして。問題は箱の中身と今さっき届いたものだ。

「腕輪ね…取扱説明書まで手書きで書いてやるし」

送り主は母親の知り合いで生態研究科？とかそんな感じの人だ。使い方は置いておいて、人体の状態を正確に把握できるモノらしい。ただし、魔科学の結晶と言われる人工知能を持った魔技が必要とのことだ。いくらすると思っただこの野郎と思いつつもそっと桐の箱の中に入れた。これもその人工知能を持たせた魔技並の価値はあるものだ。

そして、父親から送られてきたであろう物。箱、ではあった。黒い箱だ。白いテープで開かないように巻かれたような絵が書かれ、小さな宝石で密かに装飾がされた一辺3cmくらいの小さな箱だ。

「なんだよ、これ」

意味が分からない。たしかに、父親はこういう訳のわからないものに関係のある職ではあるが…説明文もなしにこれは訳が分からないといしか言いようがないだろう。

3つ目、札で封印された箱の中身は…。

「…人形だよな」

小さな妖精のような人形だ。赤い髪に透明な翅、ワンピースのよな服を着せられている。肌は白く、容姿は精巧で今にも動き出しそうな作りだ。そういえば、一緒に手紙が付いていたな。

「げ…レンさんか」

レンさんというのは父親の知り合いの一人で人工知能の研究の第一人者であり、裏切り者と烙印を押された人。案外、父親よりもこの人との記憶の方が多い。週1くらいで来るし。

ということはこの人形は人工知能を持った魔技。それもかなり精巧で一般人には手が出せないほどの金額がする貴重な物。レンさんの名前とスペックを書けば国一個くらい買えそうな額が振り込まれること間違いなしの品だ。

『ルー君へ

最近忙しくていけなくてごめんね！

お詫びにちよっと頑張って作った魔技を送ります。

順ちゃんとの知り合いの人がいい物送ってくれるらしいからそれと一緒にね。

それじゃ、入学おめでとう。これからがんばるんだよ。とある人の知り合いより』

表に名前書いているのだから「とある人の知り合い」なんて書かなくても分かるはずなんだが、癖というやつだろうか。

「さて、起動の仕方は書いてなかったし：勝手に起動するのかもしれないな。あの人の作品だし」

箱はそのまま机の上に置き、俺は部屋の片づけに戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5247t/>

魔王も学校也大嫌いだ。

2011年5月24日18時25分発行